

「約束のリバイバル・シネマ」

荒木
勇人

登場人物

椎名 晋作 (6) (20)

大学生

東 康平 (20)

晋作の同期

椎名 久作 (18) (34) (48)

晋作の父

小川 渚 (20)

大学生

小川 遥 (18) (48)

渚の母

石田 剛志 (20)

晋作の同期

上野 美夕 (22)

レンタルビデオ店の従業員

○回想／椎名家・リビング（夜）

椎名久作（34）が、映画『ラージ・フィッシュ』のDVDをプレーヤーに再生ボタンを押し、ソファに腰掛ける。

久作「晋作、始まるぞ」

椎名晋作（6）、久作の元に駆け寄る。

晋作「パパ、今日のはなんて映画？」

と、興奮に満ちた眼差しで問いかける。

久作「ラージ・フィッシュ」

晋作「……また昔の映画？」

久作「晋作が生まれた年の映画だよ」

晋作「どういう映画なの？」

久作「簡単に言うと……疎遠になった父と子

の和解をテーマにした作品で……」

晋作「全然簡単じゃないよ、疎遠って……？」

和解って何なの」

久作「そうだな、全然簡単じゃなかった……。

疎遠っていうのは、あんまり会わなくなる

ってこと。和解は……仲直り、って意味だ」

晋作「ふうん……」

久作「ちよつと早かったかな？」

と、笑って誤魔化する。

晋作「なんで、家族なのに会わなくなるの？」

ママとも疎遠ってこと……？」

久作「それは……」

晋作「僕はパパとも会えなくなっちゃうの？」

久作は、今にも泣き出しそうな晋作の顔を見てつられるように目を潤ませる。

久作「……おいで」

晋作を抱いて頬を寄せる。

晋作N「毎週金曜日は映画の日。それが父の口癖で、小さい頃から毎週金曜日には一緒に映画を観るのが恒例だった」

晋作「……髭痛い」

久作「ごめん……」

と、目を拭い晋作を離す。

前に向き直って、映画を観始める2人。映画が放つ鮮やかな色彩に染められていく、晋作のワクワクとした顔。

（回想終わり）

○アパート・晋作の部屋（夜）

映画を観る晋作（20）の退屈な表情。

隣で笑う東康平（20）。

晋作N「大学進学後に一人暮らしを始め、父

とは疎遠になってしまったが」

晋作「……面白いか？」

東「当たり前じゃん」

呆れた顔で東を見る晋作。

晋作N「今でも、毎週金曜日には欠かさずに

映画を観る習慣が続けている」

映画の中で「俺はサメを自認している」

と言い次々と海水浴客を襲う人間の男。

晋作、痺れを切らしDVDを取り出す。

ディスクには『アイ・アム・シャーク』

の文字と準新作シールが貼られている。

東「ちよつと」

晋作「こんなのを映画とは呼ばない」

東「また始まったよ」

晋作、別のDVDを再生。

テレビに古い名作が映る。

東 「また古い映画？」

晋作 「仕方ないだろ？ 小ちやい頃から」

東 「（食い気味に）お父さんの影響ね」

晋作 「……そう」

東 「そろそろ自分で面白い映画見つけなよ。

最近の映画でも良いのいっぱいあるんだし。

ほらなんだっけあのシリーズ、ヒーローの」

晋作 「『ユナイターズ』」

東 「そうそれ」

晋作 「追ってない。今は」

東 「なんで？」

晋作 「なんでも。あーもう、また最初からだ」

と、映画を巻き戻したあと、一時停止。

晋作 「っていうかお前こそ変なB級借りるの

いい加減やめろよ。Bどころじゃない、Z。

しかも準新作」

東 「じゃ……この会は今日で解散にしよう」

と、立ち上がる。

晋作 「ちよちよちよ！」

東 「……何？」

晋作「分かったよ！ BでもZでもなんでも
いいから、それだけは勘弁して」

東はまだ不満げな表情で肩をすくめる。

晋作、溜息をついて渋々DVDを出し、

『アイ・アム・シャーク』に入れ替え。

東、満足げに頷きソファに腰を下ろす。

晋作、その隣に座る。

東「そこまでして、お父さんの約束を？」

晋作「別に、そんなのじゃない。毎週続けて

きた習慣を、急にやめるのが嫌なだけ」

東「一人で観りやいいじゃんか」

晋作「分かってないなあ。誰かと映画を観て、

感動を共有することに意味があるんだ」

東「そろそろ恋人でも作りなよ」

晋作「うるさいなもう、黙って観てろよ」

東、しばらく沈黙して突然立ち上がる。

晋作、慌てて引き留めようとする。

東「……トイレ」

○タイトル『約束のリバイバル・シネマ』

○レンタルビデオ店・外観（夜）

晋作N「事件は、ある金曜日に起こった」

東、店の前でしゃがんでいる。

店から出てくる椎名。

東「遅いよ椎名、朝になるかと思った」

晋作「……なあ、東。ちょっと」

東「もゝ何？ 早く帰ろうよ」

晋作「いいから」

東、重い腰を上げる。

その背後には「閉店のお知らせ」との
貼り紙が。

○同・店内（夜）

晋作、棚の前に屈み空のケースを凝視。

晋作「……ないんだよほら」

東「ほらって……何が？」

晋作「俺の好きな映画が、全部」

東「おつかれ」

呆れた表情でその場を去ろうとする東
を必死に引き止める晋作。

晋作「違うんだって！ これもこれもこれも、
これもこれもあれも……全部ないんだよ！」
と、棚に並んでいる空のケースを次々
に指をさして言う。

東「じゃあ、あれも？」

晋作「それも！」

東「おかしいじゃんか」

晋作「だろ！？」

○大学・食堂

晋作と東、石田剛志（20）がトレ―
を持ち受渡口に並んでいる。

晋作「ありがとうございます」

定食を受け取って席へと向かう晋作に
あとから2人がついていく。

東「……それで椎名が、俺の好きな映画が
全部ないって騒ぎ出してさあ」

晋作「そんな間拔けな喋り方はしてないから」

石田「あ、騒いではいたんだ」

晋作「まあ多少」

席につく3人。

各々食事をし始める。

石田「それで、どうしたの」

晋作「どうしたもこうしたも、昨日は諦めて

東セレクトのB級映画を2本。次の金曜日

に、また見に行くつもり」

石田「うーん……確かに、自分の好きな映画

だけが全部借りられてるって、変な話だね」

晋作「だろ？ 一個あげちゃう」

と、石田のお皿に唐揚げを一個入れる。

石田「よっしゃ！」

東「いやいや俺も、石田が思ってる3倍は

変だと思ってるけどね普通に」

東、さりげなく皿を前に。

晋作は、東を薄目で睨む。

東「ええ……今の3個ゲットじゃないんだ」

晋作「それに新作ならまだしも全部旧作だし、

そんな偶然ありえるか？」

石田「確かに、今はサブスク全盛期だしねえ」

東「……店員さんが隠したんじゃないの？」

晋作「何の為にだよ……」

東「だって椎名、店員さんに嫌われてるし」

晋作「（思い当たる節があるように笑って）

……いやいや嫌われてないって。誰に対して

もあんな感じなんだよ、あの人」

石田「そういう東こそ隠したんじゃないの？」

東「それこそ何の為に」

晋作「俺が……昔の映画ばっか借りるから？」

東「その手があったか」

晋作「いや、ダメだよ！」

○レンタルビデオ店・店内（夜）

晋作、中腰になりDVDを探している。

東「椎名、まだ？俺ら1本ずつ借りたよ」

晋作「ない、今日もない」

棚には空になったケースが並んでいる。

晋作「ホントにお前じゃないよな」

東「違うって。第一俺がそんなことしたら

営業妨害で捕まっちゃうだろ？」

晋作「それでもお前はやりそうなんだよ……」

東 「どんな言いがかりだよ。それでもボクはやってないの続編みたいに言いやがって」

石田 「あるの？」

晋作 「ないよ！ ちょっと俺店員さんに聞くから、2人とも先に出てて」

東 「はいより」

○同・外観（夜）

東と石田が、店の前にしゃがんでいる。

東 「……そういやここ、閉店するらしいよ」

石田 「そうなの」

東 「うん、ここに書いてる」

と、後ろの貼り紙を指す。

石田 「やっぱり、時代の波には逆らえないね」

東 「閉店するから在庫処分でってパターン

もあると思うんだけど、椎名が閉店する事

知らなさそうだから何も言えないんだよね」

石田 「いいんじゃない？ 言わなくてもいつ

かは知ることになるんだし」

東 「それは……どっちのいいんじゃない？」

石田「あ、言ってもいいんじゃない？　の方」

東「じゃ、言っちゃうか」

晋作、店を出てくる。

東、慌てて壁の貼り紙を剥がして丸め
ポケットに突っ込む。

石田「ええ」

東「どうだった？」

晋作「ああ、またレンタル中だって」

東と石田が、顔を見合わせる。

東「レンタル中？」

晋作「そうなんだよ、どうにかしてよ……」

石田「いや、俺にはどうにも出来ないけど」

東「借りてる人、死んでんじゃないの？」

晋作「呪いのビデオじゃないんだから……」

東「延滞してるのかな？」

晋作「いや、一応返却はされてるらしいけど」

石田「なおさら気味悪いね」

東「それで、今日はどうすんの？」

晋作「仕方ない、今日はもう諦める。来週の

金曜にまたリベンジする」

石田「なんでいつ返却されるか聞かずに毎週金曜に来ようとするの？」

東「……確かに」

椎名「……」

○アパート・晋作の部屋（夜）

晋作と東・石田がテレビの前のソファに横並びで座っている。

石田「本当に同じ人が借り続けているのかな？」

晋作「そうじゃないとおかしいよ、そうじゃなくてもおかしいけど……」

石田「でも、誰が何のために」

晋作「さあ、知ったこっちゃない。でも俺は絶対に犯人を突き止めるよ」

東「何、探偵ごっこ？」

晋作「そうでもしないと、気が晴れないだろ」

東「ま、面白そうだし付き合うよ」

晋作「どうも」

東「そんなことより早く映画観よ」と、DVDを渡す。

ディスクには『スゴイダーマン2』と

タイトルが書かれてある。

晋作「……何だよスゴイダーマンって！」

東「ん……？」

と、DVDを手にとって。

東「ホントだ、間違えました」

石田「しかも2」

晋作「もう、絶対わざとだろ！」

東「違うって、2だとは思わなかった！」

晋作「スゴイダーマンはわざとじゃんかよ」

○レンタルビデオ店・店内（夜）

晋作N「そして、次の週も……」

晋作と東、レジの前に立っている。

上野美夕（22）が気怠げに対応。

晋作「ええ……まだ返ってきてないんですか。

もう3週間ぐらいずっとレンタル中なんで、

どうにかして下さい」

上野「ああ、はい……」

と、ガムを噛む。

東、晋作を憐れ目の目で見ている。

晋作「このDVD、いつも同じ人が借り続けてますよね。その人、いつも何曜日の何時頃に来るか分かりますか？」

上野「え、なんでそんなこと聞くんですか？」

晋作「いやあ……それは……」

上野「ストーリーカー？」

晋作「違いますよ！　なあ？」

と、東に目配せ。

東「いやあ（首を傾げる）」

×

×

×

晋作と東、歩きながら空のケースを棚に戻しながら話している。

東「そりゃあ、あんな聞き方怪しまれるよ」

晋作「じゃあなんて言えば良かったんだよ！」

東「それはだから、このDVD……いつも

借りてる人……いつも何曜日の何時頃……」

晋作「何が違うんだ」

東「あ、そういやさっき一個だけ見つけた。

椎名が好きな映画」

晋作、東からDVDを受け取り。

晋作「たまにはやるじゃん」

と、肘で小突く。

そのあと、DVDに目を落とす。

晋作「スゴイダーマンじゃねえかよ！」

東、笑う。

晋作「返してこい」

東「なんで？ 1だよ？」

晋作「関係ないよ」

東、残念そうにDVDを返しに行く。

晋作「……それも借りよう」

○大学・正門（夕）

蝉の鳴き声。

○同・講義室（夕）

後方の席に並んで座って講義を受けて
いる晋作と東・石田。

石田「え、1どうだった？（小声）」

東「グリルゴブリンって敵が……（小声）」

晋作は、呆れた表情で2人を見ている。

教員「これで、前期の講義は以上になります。

夏季休暇中の課題につきましては、追って

ポータルの方でお知らせ致しますので……」

学生たち、ザワザワと荷物を片付ける。

○同・廊下（夕）

晋作と東・石田が歩いている。

東「……にしても、あのDVD借りてる人は相当悪趣味だよね」

晋作「スゴイダーマン？」

石田「椎名のやつでしょ」

東「そう」

晋作「何で」

東「だって、椎名がいつも借りる映画って

昔のコアな映画ばかりじゃん」

晋作「お前がいつも言うその昔の映画がなかったら、お前の好きな今の映画だって存在してなかったかもしれないんだぞ。なんだあれ、シャークマンだっけ？」

東 「アイ・アム・シャーク」

晋作 「どっちでもいいけどね」

東 「今度続編出るらしいよ」

晋作 「観ないけどね」

○同・中庭（夕）

3人、ベンチに座って話している。

石田 「そういえば、椎名はなんでそんなに昔の映画が好きなの」

晋作 「お父さんが映画好きでさ。小さい頃によく一緒に観てたから。その影響かなあ」

石田 「夏休み、帰るでしょ？」

晋作 「大学入って一人暮らし始めてから実家にはしばらく帰ってないよ」

石田 「なんで」

晋作 「別に……特に理由ない」

東 「俺がついてってあげようか？」

晋作 「なんでお前が来るんだ」

東 「息子さんを僕にくださいって」

晋作 「あげるわけないだろバカが！」

○アパート・晋作の部屋（夜）

晋作、ベッドに寝転んでスマホを触る。
久作とのメッセージを開くが、会話は
途切れ途切れで数ヶ月更新がないまま。
ふと帰省する旨を告げるメッセージを
打ち込むが、思い止まって天井を見る。

○回想／椎名家・リビング（夜）

晋作（18）が制服姿でソファに座り
映画を観ている。

久作の声「ただいま」

晋作「………」

久作、入ってくる。

久作「お、新作に備えて復習かあ」

と、晋作の隣に腰を下ろす。

晋作「……近い」

と、距離を置く。

久作「ありそうそう、このシーン。ここ重要

だからよく覚えとけ」

晋作「……観てきたの」

久作「試写でな。まさかこんなに敵対してた
クールマスターがゼノス相手に一人で……。
ババババッと攻撃しながら突っ込んでさ」

と、興奮した様子で大袈裟な身振りで
うっかりと口を滑らせる。

久作「……」

晋作「なんで言うの」

久作「……俺、今なんて言った」

晋作「俺がどれだけ新作を楽しみにしてたと思
思ってるんだよ！」

久作「違うそういうつもりじゃ」

晋作「何が違うんだよ言い訳すんな！ ネタ

バレとか1番ありえないし、マジで最悪！」

久作「……ごめん！」

晋作「もういい」

と、テレビを消して立ち上がる。

久作「……晋作」

晋作、久作を無視し部屋に戻っていく。

久作、溜息をついてポケットから映画
「ユニターズ」の前売券を取り出す。

○回想／同・晋作の部屋・外（夜）

久作、ドアの下から前売券を差し込む。

晋作の声「……何これ」

久作「前売券だよ。さっきは悪かった。何も

お前の楽しみを奪おうと思った訳じゃない、

むしろお前にもっと楽しんでほしくて……」

晋作の声「でも奪った」

ドアの下から前売が返ってくる。

久作「だからそんなつもりじゃ」

晋作の声「死ぬんでしょ？ クールマスター」

久作「死……死ぬなんて言ってないはずだぞ」

と、前売券を入れるがすぐ戻ってくる。

晋作の声「言ってるようなもんだよ！」

久作「じゃあなんだ？ 死ぬって分かったら

観るのをやめるのか」

晋作の声「死ぬんだね」

久作「クールマスター死なない」

晋作の声「いいえ、死にます！」

久作「自分の目で確かめろ！！」

と、券を挿じ込みドア下の隙間を塞ぐ。

晋作の声「死ぬって分かって観ても、純粹に
楽しめないじゃんか」

久作「俺たちだっていつか死ぬって分かった
上で必死に生きてるじゃないか！」

晋作の声「やっぱ死ぬんだ」

久作「皆いつかは死ぬ」

晋作、ドアを開けてクシャクシャに丸
めたチケットを久作に投げつける。

ショックを受ける久作の顔。

扉がボタンと閉まる。

（回想終わり）

○アパート・晋作の部屋（夜）

晋作、天井を見つめたまま物憂げな顔。

ふとスマホを手にとって、打ち込んだ

久作へのメッセージを削除。

スマホを置き、眠りにつく。

○レンタルビデオ店・外観

入口の前に立つ、晋作と東。

晋作「今日はとっておきの秘策を用意したぞ。」

これでやつと……犯人の手がかりを掴める」

東「えっ……何？」

○同・店内

晋作「お姉さん、映画は……好き？」

レジで上野に声をかける晋作。

東「ナンパ？」

上野「ナンパですよね」

晋作「ナンパじゃない」

晋作、ポケットから映画の前売券を3

枚取り出しカウンターに置く。

上野の目が輝く。

×

×

×

晋作と東、パソコンを触る上野を挟み

立っている。

上野「……やっぱり出来ません」

晋作「おっと……、これもあった」

ポケットからもう1枚前売券を出して、

上野の前でヒラヒラさせる。

上野「……（ゴクリ）」

晋作、券を取ろうとする上野をかわす。

晋作「毎週何曜日の何時ごろ、誰がそれらを借りているのか：僕らが知りたいのはただそれだけです」

東「僕らじゃなくて僕、でしょ？」

上野、パソコンの操作を再開。

上野「……ビンゴ。このお客さん、毎週金曜の午後5時頃に、合計10本のレンタルと返却を繰り返してる」

晋作「……つてことは、今日が決戦の日……」

東、冷めた目で2人を交互に見ている。

上野「あの、警察ではないですよね」

東「ええ、違います」

晋作「全然違いますよ」

東「むしろ逆かもね」

上野「とりあえず一旦出てください」

と、2人をカウンター内から追い出す。

晋作「すみません、やってみただけで」

上野「分かりますけど」

晋作「あの、その人の顔覚えてますか」

上野「多分：見たら分かると思います」

晋作、犯人確保を確信したように片方の口角を上げて、東に向かって微笑む。

東「うわぁ何……まだやってんの？」

○バス停（夕）

レンタルビデオ店の反対側の道。

晋作、双眼鏡で店の入口を見る。

東「映画の観すぎ」

東の両手にはパック牛乳とあんぱんが。

晋作「お前が言うな」

東「いや、張り込みと言ったらこれでしょ」

晋作「ステレオタイプすぎない？」

東「双眼鏡も大概だよ、貸して」

と、牛乳を渡して双眼鏡を取る。

晋作「双眼鏡は実用的だから」

東、双眼鏡を覗き込む。

東「あっ……」

晋作「何？ 犯人？」

東 「いや、店員さんが」

晋作 「紛らわしいなもう」

○ 双眼鏡の視点（夕）

店へと入っていく小川渚（20）の姿

と、慌てて2人を呼んでいる上野の姿。

上野 「（あの人！）」

東の声 「手振ってる」

○ バス停（夕）

東、双眼鏡を覗きながら上野に手を振る。

東 「ほら、椎名も」

晋作 「貸せ」

○ レンタルビデオ店・外観（夕）

上野 「来たって！ 違う！ 手振ってない！」

と、眩き手招きしている。

○ バス停（夕）

晋作 「呼んでんじゃねえか」

○レンタルビデオ店・店内（夕）

渚、会員証を出して支払いをしている。

○同・外観（夕）

上野「早く！ 帰っちゃうって！」

○横断歩道（夕）

晋作と東、赤信号を待っている。

○レンタルビデオ店・外観（夕）

渚、上野の背後で店を出て行く。

上野はそれを見逃して振り返る。

慌てて入口のガラス越しに店内を確認

するも、渚の姿は見当たらない。

上野「あれ……」

晋作と東、駆け足でやってくる。

上野「さっきまで中にいたんですけど」

東、辺りをぼんやりと見渡して

東「……ん、あれじゃないの」

と、遠くに見える渚を指でさす。

上野、晋作から双眼鏡を奪って覗いて。

上野「……早く！ 行つて！」

晋作「東、行くぞ！」

と、走り出す。

東「ええー……また走るの」

晋作「いいから早く」

○踏切（夕）

晋作と東、走ってくる。

下りていく遮断機の向こうに渚の姿が。

晋作「あああああ……」

東「まだ通れるよ？」

と、遮断機に近づいて。

晋作「やめろ」

○商店街（夕）

晋作と東、小走りで渚を尾行しながら

角の店に隠れ隙を伺う。

道の先ではビデオ店の袋を持っている

渚が歩いている。

晋作がタイミングを伺っていると、東がフラフラと勝手に飛び出す。

晋作「……おい、おい！」

と、引き止めようと飛び出す。

振り返る渚、フリーズをする晋作と東。

渚が前に向き直り、歩き出す晋作と東。

振り返る渚、フリーズをする晋作と東。

渚が前に向き直り、歩き出す晋作と東。

渚、不意に立ち止まって振り返る。

渚「あの、何ですか？」

晋作「はい……？」

渚「さっきから……尾けてきてますよね？」

晋作「いや別に……な？」

と、東に目配せ。

東「コイツがそのDVDについて聞きたい

ことがあるみたいで。僕は関係ないですよ」

晋作「おい……！」

東「嘘つく必要ないでしょ。それちよつと

見せてもらっていいですか」

渚、大胆に近づく東に怯えて後退する。

東 「怪しい者じゃないんです」

渚 「それはこっちが決めます」

晋作 「ちよつと……、怖がつてるから……！」

と、東を制止。

晋作 「すみません急に、変ですよね」

渚 「つて言うか、誰ですか？」

晋作 「いや誰って言うか……別に誰でもない
んですけど、あの、俺、椎名と申しまして。

実は、その……」

渚 「椎名……？」

と、顔色を変える。

○喫茶店・店内（夕）

晋作と東・渚が対面になり座っている。

机には10枚のDVD。

渚、頭を下げる。

渚 「すみません……ずっと借りっぱなしで、

独占しちゃって……」

晋作 「あーいえ、責めようとか全然そういう
ことじゃないんです」

渚 「え……？」

晋作 「ただ、自分と同じ趣味の人がいるのか
と思うと、ちよつと気になっちゃつて……」

東、ニヤニヤしながら晋作の方を見る。

晋作、東を肘で小突く。

渚 「実は私の趣味ではなくって……私の母
の、思い出の映画らしいんです」

晋作 「お母様の」

渚 「学生時代、初恋の人との思い出の映画。
とは言つても、母は実際に観たことがない
そうなんです」

晋作 「観たことがないのに、思い出の……？」

渚 「はい、私も最初は戸惑いました。それ
で母に話を聞いたところ、最後にどうしても
観ておきたいって言うので私が借りてた
んですけど、中々観切れないみたいで……」

晋作 「そうだったんですね……」

東 「偶然こんなに一致するもんなんです」

渚 「そのことで、ちよつと気になることが。
話せば長くなるんですが……」

○回想／高校・教室（夕）

放課後、夕陽の差し込む教室。

小川遥（18）が、窓辺の席に一人で座って物憂げな表情で校庭を見ている。

久作（18）、入ってくる。

久作「あれ……小川さん、まだ残ってたんだ」

久作、自分の机から忘れ物を回収して

遥に近づいていく。

（回想終わり）

○喫茶店・店内（夕）

渚 「不登校でほとんど教室にも入ったこと

のなかった母の名前を、その人だけは覚え

てくれていたみたいで」

晋作「その人が……」

渚 「母の初恋の人です」

○回想／高校・教室（夕）

久作、遥の前の席に座って声をかける。

久作「学校楽しかった？」

遙、無言で首を横に振る。

久作「そっか……そうだよ。実は俺も、家で映画観てる方がずっと楽しい。小川さんは、映画とか観たりするの？」

遙、ゆっくり首を横に振る。

久作「映画はいいもんだよ。どんなに退屈な日でも、一瞬で色んな世界に連れて行ってくれる。ちょうど昨日ね、良い映画観てさ」と、立ち上がる。

身振り手振りで映画の再現をする久作。
渚の声「その人はいつも、好きな映画の再現をして母を笑わせてくれたそうなんです」
遙、思わず笑みを溢す。

○河川敷（夕）

自転車を押して、遙と歩いている久作。
久作「もし良かったら、今日みたいに金曜日だけでもおいでよ。まだまだ教えたい映画がいっぱいあるんだ」

（回想終わり）

○喫茶店・店内（夕）

渚 「それから毎週金曜日だけは勇気を出して、学校に行くようになったそうなんです」

東 「それって、もしかして……」

渚 「椎名さんです。椎名、久作さん。名前を聞いた時……まさかと思ったんですけど」

晋作 「そのまさかですよ。間違いなく、俺のお父さんです。毎週金曜日は映画の日……

それが父の口癖で、小さい頃から金曜日には一緒に映画を観るのが恒例でした。その時、教えてもらった映画が、ここにある作品で」

東、ポカンと2人を見ている。

渚 「母もこの話を聞いたら喜ぶと思います」

晋作 「（神妙な面持ちで）お母様のこと……どうか気を落とさないでください。ご回復を、お祈りしています」

渚 「……へ？」

晋作 「えっ」

渚 「回復って、何のことですか」

晋作 「最後にどうしても……ってさっき……」

渚 「あ、ああ……すみません、違います。

お父様が教えてくれた映画、配信にはない
みたいで。それで、あそこが閉店する前に
どうしてもって」

晋作 「閉店！？ あそこが！？」

東、ポケットからクシャクシャに丸め
た閉店の貼り紙を出して渡す。

東 「言ったら悲しむと思って」

晋作 「……」

東 「……ごめん」

晋作 「なんだ……良かった……」

東 「……？」

晋作 「お母様、元気だったんだ」

渚、微笑んでゆっくり頷く。

渚 「お父様は、お元気ですか」

晋作 「はい、元気だと思いますよ。多分……」

渚 「多分？」

晋作、俯く。

東 「コイツしばらく実家帰ってないんです。
連絡も、取ってないみたいで」

渚 「……そうだったんですね。お父様とは、
今度は本物の映画を観に行こうって約束を
してたみたいなんですが……母が家の事情
でこっちに引越すことになってしまつて」
晋作 「そうだ……今度の金曜日に、皆で映画
でも観に行きませんか？」

渚 「えっ」

晋作 「お母様も誘つて、皆で。近々帰ろうと
思つてたんですけど……一人だとなかなか」
渚 「名案ですね、それ！」

○ 高速道路

一台の高速バスが駆け抜ける。

○ 高速バス・車内

晋作と東、渚と小川遥（48）が通路
を挟んで横並びに座っている。

×

×

×

遥 「高校時代の椎名くんにはんとそっくり」
渚 「何年前の話？」

遥 「もう30年前になるかな？ 椎名くん、

私のこと覚えてるといいけど」

×

×

×

東 「椎名、小川さんの前で猫被ってたよね」

晋作 「うそ、どこが」

東 「だって最初、犯人見つけたら捕まえて
ボコボコにしてやるって言ってたじゃんか」

晋作 「言ってねえよ」

ふと東の方に目をやると、隣にいる渚
と遥が晋作の方を見ている。

晋作 「いや、ホントに言ってるんですから！
コイツすぐ嘘つくんですよ！」

東、眠ったふり。

晋作 「オイ！」

○河川敷（夕）

夕陽に照らされた川のそばで談笑する

晋作・東・渚・遥の姿。

晋作 「こいつなんか、ちゃっかりあんぱんと
牛乳まで持ってきてて……」

東 「いや、双眼鏡も大概ですよ」

笑って話を聞いている渚と遥。

ふとこちらを見ている男の姿に気付く。

久作（48）だ。

晋作 「あっ……」

遥 「椎名くん……！」

久作、坂を降り4人のもとへ。

久作 「久しぶり」

晋作 「うん……」

晋作、気まずそうにはにかむ。

久作、遥を二度見。

遥 「久しぶり」

久作 「……小川さん！？　なんでここに！？」

晋作 「まあ……話せば長くなるから」

久作 「こっちは……まさか彼女！？」

渚 「……小川渚です、彼女ではありません」

久作 「娘さん！？　ん、小川……？」

遥 「色々あったね、お互いに……」

久作、東を見る。

久作 「小川……何君？」

晋作「違うって、息子さんってワケじゃない。
ただの俺の大学の友達」

一同、笑う。

○ミニシアター・外観（夕）

○同・館内

『アイ・アム・シャーク2』の宣伝用

ポスターが飾られた壁の前。

5人がやってくる。

久作「お、これ続編やるんだ。知ってたか？」

晋作「俺はこういう低俗なのは……」

久作「あのなあ晋作……真の映画好きっての

は、どんな映画だって愛するんだ」

東「そうだぞ、久作……晋作」

久作「久作は俺だよ」

東「紛らわしいな」

久作、腕時計を確認して。

久作「まだもうちよつと時間あるからトイレ
行きたい人は今のうちに」

東と渚と遥がその場を離れる。

久作「晋作は？」

晋作「……大丈夫。さっき、大福食べたから」

久作「さすがだ」

椅子に腰を下ろす2人。

微妙だった距離感が、一気に狭くなる。

× × ×

トイレから出てきた東、遠目から2人を見て立ち止まる。

遅れて出てくる渚と遥。

東「ポップコーン、買いに行きましょうか」

× × ×

晋作「……お父さん」

久作「ん？」

晋作「なかなか帰れなくてごめん」

久作「何だよいきなり（と、笑って）」

晋作「覚えてる？ 俺が高校生の頃……映画

のネタバレをされて怒ったこと」

久作「……覚えてる」

晋作「酷いことしたなって今でも後悔してる」

久作「……気にしてないよ、俺が悪かったし」

晋作、黙って首を横に振り。

晋作「聞いたよ。映画の再現をして、いつも遙さんを笑わせてたって。今思えば、あの時もただ、純粹に作品の魅力を伝えようとしてくれてたんだなあって……」

久作「……」

晋作「これからは、もっと帰ってくるからさ。毎週金曜……とまではいかないけど、その時はまた今日みたいに一緒に映画でも……」

久作「ああ、約束だ」

飲み物とポップコーンを手に戻る3人。

東は晋作に、遙は久作に飲み物を渡す。

晋作「……ありがとう」

久作「気が効くねえ」

遙「そういや、私たち全員まだ何を観るか

分かってないんだけど……」

久作「おっとそうだった……」

と、5人にチケットを配る。

渚「どんな話なんですか？」

久作「……疎遠になった父と子の和解、かな」

晋作、受け取ったチケットを見て驚く。

○同・シアター前

入口横に「ラージ・フィッシュ 4 K

リマスター版」と書かれたポスターが。

○同・シアター内

並んで席に座っている5人。

照明が徐々に落ち、暗闇に包まれる席。

晋作、スクリーンを真っ直ぐ見つめる

久作の横顔を見る。

×

×

×

映画が始まる前にふと久作（34）の方を見る晋作（6）。

×

×

×

晋作は笑みを溢し、前に向き直る。

映画が放つ鮮やかな色彩に染められていく、晋作のワクワクとした表情。

了